Kさんの場合

息子さんが知的障害（当時６歳）

居住地：宮城県塩竈市
インタビュー日：2024 年5月14日

お話　：Kさん
聞き手：橋本武美

橋　小１から支援学級でした？
K　そうです。でも幼稚園に入る前も、2歳ぐらいから療育のところには通っていて。
橋　えーと、母子分離？
K　そうです。母子分離をしながら。
橋　どういうところの？
K　初めは塩竈市がやっているところだったんですけど、今はもう塩竈市じゃなく委託されて別になったんですけど。「さわおと」さん（認定 NPO 法人さわおとの森）って分かります？
橋　分かります。
K　今はさわおとさんになったんですけど、さわおとさんになる前は塩竈市でやっていて。
橋　市がやっていた、そういう母子分離の。
K　はい。そこに通っていて。
橋　2歳代から？
K　そうです。
橋　早いですね。もう気づいていた？
K　いや、私は全然。そういう子もいるよねーくらいの感じだったんですけど。
橋　上にお子さんっていらっしゃいますか？
K　いない、一人っ子なんです。
橋　うちも一緒です、一人っ子。
K　だから、分からないっちゃ分からなかったんですけど、おばあちゃん、義理の母が、やっぱりちょっとおかしいんじゃないかっていうことで、一回診てもらおうって。心配性の義母なんですね。「診てもらって何でもなければ安心だから」って診てもらったときに、あんまりちっちゃいから、グレーゾーンだったんですよ。かもしれない、かもしれないでずっと来たんですけど。
橋　一番「かもしれない」って思ったのって、言葉が遅いとかですか？
K　あのね、視線が合わない。あと、なんか寝転がって遊ぶのが気になったそうなんです、義理の母が。そのとき私はまだ自閉症っていう障害を知らなかった。全く知らなかったので、よくいるよねって思ってた。
橋　分かんないですよねー。私もまるっきり知識がなかったので。
K　そこから、初めは市内の病院の小児科の先生に診ていただいて、「そうかもしれません」って。そこで次に塩竈市の福祉のほうに相談して、聴覚の検査をしたり、いろいろ……。
橋　最初に音が聞こえるかどうか検査しますよね。
K　でも、やっぱりそこでも分からない。まあ小さかったのでなおさら、おっかながってなのか、あんまりちゃんと検査もできてないのか、まあ様子見ましょうっていう感じだったんですけど。でもやっぱり心配症なので、様子見てるよりも、こういう療育のところがあるからって主人が調べてくれて、通わせてみようって。
橋　ご主人も。

K　まだグレーのときから。それで、初めは普通の子どもたちが行ってるサークルみたいなのに入ってたんですよ。ママさんサークルみたいなのに入ってたんですけど、そうじゃなくてちゃんと療育ができるところに、塩竈市がやってるからいうことだったので、サークルはやめて、そっちに母子分離しながら通って、通っている間に児童相談所につながったりして。あと、2歳半ぐらいのときに病院に行って情報をいろいろ教えてもらって、そこに行ってみようっていうことで。その当時なかなか予約が取れないって言われてたんですけど、取れたので行ってみたら「かもしれないじゃなくて、自閉症だね」っていうことで、ああやっぱりそうですかと。その頃には私たちもいろいろ勉強したり人に聞いたりとかして、自閉症がどういうものなのか知っていたので、うちの子はある程度当てはまってるなっていうのは薄々気づいてて。普通の母子通園してるときの先生方も、ほかのお母さんたちもすごくいい人たちで、いろいろ親も勉強させてもらいながら、目指すはまず幼稚園だということで、それで幼稚園に2年間行って卒園して……。

橋　じゃあ、幼稚園は年中と年長ですか？

K　そうです。それで今度は、次の目標は小学校にするか、利府支援学校にするかっていうふうになったときに、子どもがしんどそうだったら無理して進路は決めつけたくなかったので、この子がどこまでできるか成長を見ながら、小学校の支援学級という選択をして、6年間。ところが、その幼稚園の卒園のときに震災に遭ったんです。もうすぐ卒園だよっていうときに震災。

橋　そうか、卒園式よりも前？

K　前です。卒園式も延び延びになってしまって。

橋　あのとき全部延び延びになっちゃってね。ご自宅のほうの被害はどうでした？

K　全壊。

橋　津波？

K　そうです。

橋　そのときは、どこに？

K　その日は幼稚園だったので、子どもは幼稚園に行きました。私も外に出掛けてて、そろそろ帰ってくるから家に帰ろうっていう車の中で私は地震に遭ったんですよ。

橋　幼稚園は、バスで帰ってくるの？

K　そうです。ちょっと高台のところにある幼稚園に通ってて、でも家は海のすぐ近くなので。地震の後に、津波来るっていうサイレンとかは鳴ってたんですけど、私も勉強不足で「そうは言っても津波って……」っていう感じだったんですよね。

橋　みんなそうですよね。

K　近所の人たちものんびり「津波来るかもよ」って、「ちょっと高台に移ったほうがいいかもね」ぐらいで。でもこれから幼稚園バス来るんだよね、来たら危ないのかなって。すれ違ったらやばいから、バスのルートを知ってたので、そのルートを車じゃなくて歩いていこうと思って。歩いていれば見つけられるから。

橋　絶対に入れ違いにならないように。

K　それで歩いていったら、バスが出発せずに園にいたんですよ。

橋　あーそれは。

K　それで助かったは助かったんですけど、津波が来たっていう情報を幼稚園で聞いて、うちたぶんダメだなと思って。帰る所なくなったなと。

橋　その情報は何でしょう？　ラジオかな。

K　人づてです。下が商店街とかだったので、やっぱりみんなが心配して。

橋　上がってくる人たちも？

K　そうです。そういう人もいるし、やっぱり心配して……。

橋　ごめんなさいね、塩竈は地理的なことがちょっと分からないので。

K　そうですよね。鹽竈神社は分かります？

橋　分かります。

K　神社って高台ですよね。で、下が海。

橋　メインストリートっていうか。

K　神社の下は大体津波が来たんですけど、うちはそっちのほうだったんです。津波が来るっていうので上がってくる人もいれば、幼稚園に孫がいるからとか何とかで「大丈夫か？」って来る人たちもいて、「今、下はこんな状態だ」って教えてくれるので、それで何となく分かって、ああ津波が来たんだと。それで、じゃあどうしようかなと思って……。

橋　でも、まず息子さんとはそこで、安全なところで一緒にいて。

K　でもやっぱり自閉症だから、「ママーっ」っていうんでもなく、淡々と、ああ大丈夫だったんだなと。「帰るとこないんだよ」って。でも、帰る人たちはどんどんみんな迎えに来たりとかして帰っていくわけですよ。で、帰れない人はどうしようってなって、雪も降ってきましたよね。

橋　あー、あの日寒かったんですよね。

K　先生方が園にあるおにぎりとかをちっちゃく握ってくれて、取りあえず食べなと。あと、おやつとかもみんな出してきて持たせてくれたりしたんだけど、うちの子は偏食児童だったんです。「要らない！」って言って何も食べてくれなくて、支援についててくれた先生が、「でもね、これから食べ物大変になるかもしれないから、少しでも食べな？」って言ったんですけど、やっぱり「要らない、要らない」って。「先生、もったいないから他の子にあげてください」って言って、結局食べなかったんですけど。で、あそこは高台がちょこちょこあるんです。幼稚園とはまた別な、ちょっと高台のところに義理のおじいちゃんとおばあちゃんが住んでいる家があるので、そっちになら行けるかなと。そっちは大丈夫だと思ったんですけど、ただそこに行くには降りて津波が来たところを通って行かなきゃいけないので、どうやって行ったらいいのかが分かんないし、その当時、おばあちゃんたちにあんまり懐いてなかったんです。

橋　うちも（笑）。

K　「おじいちゃんとおばあちゃん家にこれから行くよ」って言っても、「嫌だ！　行かない！　おうち帰る」だったんです。もう困っちゃって。でも先生たちだって自分の家も心配だろうし、子どもさんとか家族が心配だろうに、やっぱり園児たちがいれば帰れないじゃないですか。申し訳ないと思って、そうしたら園のバスの運転手さんが、その頃ワンワンバスっていうかわいい幼稚園バスがあったんです。普段はそのワンワンバスに乗らなかったんですけど、「ワンワンバス乗せてやっから、ワンワンバスで連れて行ってあげるから」って言ってくれて、そしたら「うーん、行く」ってなって、「よしよし、ありがとうございます」って言って、それで津波が来てないところを通って……。

橋　運転手さん、道分かるしね。

K　そうなんです。塩竈も全部津波が来たわけじゃなかったんですね。ほんとに海の近辺あたりだけだったので、反対側を通れば行けるから、ちょっと遠回りだけどっていうことで、それで一応おじいさんおばあさんの家にはたどり着くことができて。避難所に行くことなく、そこで何とか。

橋　おじいさんとおばあさんも、特にけがとかもなく？

K　そうですね。ちょっと高台のところなので、そこはほんとに、津波って何？っていうくらい平和な感じ。岩盤が強いので、地震も「すごい揺れたね」ぐらいで、水とか電気は止まりましたけど、でも畑とかもやっていて発電機も持っていたので。私たちは津波にあったところを「下界」と言ってたんですけど、下界と上と全然違うので。畑があるから野菜もあるし、井戸もあるので、飲み水にはなりませんけど多少の水は大丈夫っていうことで、まず何とか。

橋　落ち着いて……。

K　そして、主人も何日かして何とか帰ってきて。

橋　ご主人と連絡は？

K　取れなかったです。

橋　そうですよね。電話もつながらないし。

K　その頃ね。

橋　主人の仕事は、そのときは仙台？

K　うん、仙台です。でも、津波の心配がなかったのは分かっていたので。ただ帰りの方法が、電車ももちろん動かないですし、やっぱりあの頃仙台に勤めていた方々はみんな歩いたそうなんです、塩竈まで。それにしかりで、うちの主人も歩いてきて。ルートを知ってるので、やっぱり海じゃないほう、利府のほうとかを通って、津波が来てないところを通ってずっと歩いて帰ってきてくれたので、ちょっと時間はかかったんですけど。夜中かな、次の日かな、

には帰ってきてくれて。やっぱり分かったらしくて「じいさんばあさん家にいるだろうって思ったからこっちに来た」と言って、家族は何とか大丈夫だったんですけれどもね。

橋　でも家に戻れないから、お気に入りグッズとかも……。

K　そうですね。ただそこが私も読めないんですけど、息子は泣きわめくでもなく騒ぐでもなく、人形のように感情が無っていう感じで。ただ食べるものが、おじいちゃんおばあちゃんも食が太いわけじゃないし、買い足しをすごくいっぱいしてる人たちじゃなかったので、食材はあんまりなかったんですけど、でも一気に家族が 3 人押し寄せてきて、しかも若者たちで、大人は何とか何でも食べるからいいけど……。

橋　息子さんはその頃、どういうものが好きだったんですか？

K　その頃は、ご飯、ふりかけ、麺。麺も素麺みたいな。

橋　あ、素麺。

K　つゆだけの。そんな感じですかね。

橋　麺好きな人は多い。

K　あと、ゼリーとかも食べるんですけど、「黄色じゃなきゃ嫌だ」とかいう感じだったので、そんなのおじいちゃんおばあちゃん家にあるわけがなく、やっぱり仕方ないから「食べなさい」って、「こういう事情で食べないと死んじゃうよ」って言っても「要らない！」。でも、そうは言ってもお腹すいたら食べるだろうって思ったんですけど、食べなくて。そのうちに、それまではおじいちゃんおばあちゃんが苦手だったけど、無になってるので嫌がるでもなかったので、私たちもこれからの生活があるし、家のほうも心配なので見に行かなきゃっていうことで、ある程度津波が引いた頃に行ったら、もう全然違かったわけですよ、状況が。

橋　何日ぐらい後ですか？

K　2 日ぐらい後には、取りあえずおじいちゃんおばあちゃんに、子どもを「お願いね」って預けて。

橋　車で？

K　車は、あのとき私が車で動けばよかったのに、幼稚園バスとすれ違うとダメだからって歩いてきてしまったがために、車もダメだったんです。ほんとに全部がダメになってしまって。はぁ……。車をちょっと高台に動かすぐらいはできたはずなのに。でもそのときは、まさかここまで来ると思わなかったので、来てもせいぜい玄関のとことかがちょっと……。

橋　ちょっと畳とか上がってしまうかもしんないけど……。

K　大雨のときなんかは、確かに水が上がったりするときがあったんです。家の中まで入らなくても、せいぜいそのくらいかなと思ってたんですけど、とんでもなかったので。

橋　おうちはどのぐらい？

K　1 階は全滅だったんです。1 階は全部浸水してて……。

橋　水が来たって分かる感じですか。

K　そうですね。全部泥かぶってたので。ただ、2 階は大丈夫。水が引けば何とか入れて、2 階のものは何とかなったけど、1 階のものは全部ダメで。隣の家に物置みたいなのがあったんですけど、津波の勢いで倒壊したんですよ。それがうちのほうに寄りかかってきて、家もちょっと壊れた感じだったので。まぁ全壊とはいえ……。

橋　で、でも住める状況ではないですもんね。

K　そうですね。

橋　2 階に津波が来てなかったとしてもね。

K　主人が、もうここには住みたくないと。また津波が来る可能性がゼロじゃないと読んだみたいで、だから「この土地にはもう住まない」って言って、そこに住むのはもう無しと。でも家は残っているので、解体するにしろ何にしろ、もう私たちしか動く人がいないので、でも主人も仕事が動き始めているわけなんですよ、仙台は何でもなかったので。震災に遭ってるということで何日間か休みはもらったみたいなんですけど、でも途中から仕事に行かなくちゃいけなくて。断水もあったので、水汲みに行っても一家族これくらいとか決まってて、私たちは流されてるので水を汲んでもらう容器すらなくて、しかも主人もいなかったから私が 1 人で行かなくちゃいけなくて。そのときは必死なので「いいよ、行く行く」って言って行ったけど、みんなで飲むのに「1 人につき」なので、それがちょっと……。

橋　給水車とかが来るんですか。

K　小学校とか中学校に来て。
橋　汲みに行く？
K　そうなんです。汲みに行かなくちゃいけなくて。
橋　どのぐらい離れたところ？
K　歩いて 15 分。
橋　結構ですね。
K　二小だと 15 分。学校は高台なので、自分も高台だから、必ず 1 回降りてまた登るっていうのをしなくちゃいけなくて。そのとき子どもは卒園と入学を控えていて、もちろん机とかランドセルとかはもう全部どこに行ったのやらだったんですけど、入学はどうなんだろうって。学校に行く前に支援学級も何回か体験させてたんですね。前住んでいたところにはもう帰らない、でも学区的には同じ学区だったので、ここからは通えると。それで、小学校にちょうど給水車が来てるっていうことで、行って、そのときに……話ちょっとずれるんですけど……。
橋　もう全然、前後してもいいです。
K　水もらいに行ったって水入れるものないし、どうしよう……って歩いてたら、知り合いの薬屋さんの人がちょうど車で来ていて、水を入れる容器をくれたんですよ。「貸してあげる」って言われたけど「いいから気にしなくて」と言ってくれて、「ありがとうございます」って言って。でもそんな大きいのをもらっても、1 人につき入れられる量は決まってるんですけど、でもないよりいいと。それを持って小学校に行って、そしたらちょうど私の 2 人前で水がなくなったって言われて。
橋　えー、そんなことある？
K　でも、ほんとにもう家に水がなかったんですよ。大人は何とか我慢できるけど、おじいさんおばあさんは薬も飲まなきゃないし、子どもにも飲ませなきゃないし、私もさすがに泣いて、自衛隊の人に「もうね……」って。そして、車で来てる人、家族がいる人は 2 人でも 3 人も来てるわけですよ。車で来るから重いものでも簡単に買っていくんですよ。買い物に行っても、スーパーで 1 人何点までって決められて並ぶんですけど、それだって家族で来れる人は車で簡単に来て、5 人も 6 人も並んで買っているわけです。私は 1 人でどこまででも歩いて行かなくちゃいけなくて、それで 5 人分 6 人分って言っても無理なんですよ、1 人何点って決まってるから。だから「最低限子どもの食べられるものだけ買ってこい」って言われて「分かった」って行って。そうすると、知ってる人が前の方に並んでると気づいてくれたりして、うちの子のことも知ってるから、「何食べるの？　私も買ってたからあげっから」って言われて、もらったりして。ほんとに人に助けられて。それでも全然足りなかったんですけど、何とか。で、二小に水汲みに行ったときに、あそこも避難所になってたので、小学校の先生も待機してるから……。
橋　避難してる方たち……体育館に？
K　体育館に。それで、入学する予定だったけどもとの家にはいない、こっちにいるっていう情報だけは一応学校に伝えておかなきゃないなと思って行ったら、たまたま見学に行ったときの特学の中の先生が 1 人いらっしゃったんですね。そして、1 回か 2 回しか行ってないのに覚えててくれて、もうすごくうれしくて、事情を話したら「あら何だや」っていうことで、職員室に水が何本かあったのを「これみんな持っていきな」って言ってくれて、「いやーダメです先生」って。でもそのとき私も泣きながらしゃべってたので、そうしたらその先生が「いいからいいから」って。
橋　その先生いてよかった。
K　うちの子のことを「元気なの？」って、やっぱり子どもを心配してくれて、「食べてんの？　あんパン食べる？何々食べる？」ってみんな持たせてくれて。でも私 1 人なので持てなくて、そうしたら用務員みたいな人で待機してる方がいて、「何々くん、これ持って一緒に行って」って言ってくれて、「いいです」って言ったんですけど、「いいから、こういうときは遠慮しないの」って怒られて。もうほんとにその先生がいなかったらどうなってたか分かんないっていうぐらい、そのときに水と食べ物を子どもの分も十分頂いて帰って。「学校のことは気にしなくていいから、来れるときにおいで」って言われて。
子どもはというと、子どもの頃は「ママママ」で離れなくて、おばあちゃんとかおじいちゃんが来ても「ダメ」って家に入れない、そういう子だったんですけど、でも行かなくちゃないから……。私も以前は何よりも子どものことだったんですけど、そのときはもうまずは住むところをどうにかしなくちゃいけない、これからどうしたらいいか決めなくちゃいけないほうが先に立ったので、どうしても行くわけですよ。そうすると、おばあちゃん家がガラス張りの家

なので、ガラスに顔をベタっとくっつけて見送られるんですけど、でも泣くわけじゃないんです。私の姿が見えなくなると、ちゃんと戻ってくるんですって。後からおばあちゃんが「ちゃんと戻ってきてお利口にしてたよー」なんて。おじいちゃんおばあちゃんも、今まで懐いてなかったから遊び方とかも分からなかったんですけど、何とかその子のペースでいろいろやってくれて。おもちゃなんかもちろんないんですけどね、紙で何か書いてやったりとかしながら遊んでくれて。でも、そろそろ帰ってくる時間になると、またこうやってガラスにずっとへばりついて待ってるんですよ。「こっちにおいでって言っても、へばりついてね」っていうのは聞いてたんです。ただそのとき、うちの子がどういう気持ちでいたのかとか、全然分かんないんですよね。私が帰ってくれば、また淡々と食べられるものだけを食べ、お風呂には入れなかったけど、それでも嫌だともギャーって泣くわけでもなく、ほんとに淡々と毎日過ごしてくれて。そして、今度学校が始まるよと。

橋　5月ぐらいとかかな。

K　そうだったと思います。

橋　2カ月ぐらい遅れたかな。

K　そうですね。連絡が来てたんで、入学式はもちろん平服でってことで、もう何もかもなかったりする子もいるからっていうことで。でも、うちはおばあちゃんがもう用意してくれてたんです。やっぱりそれを着せたいと。

橋　着せたいよなー。

K　着られない子もいる中でどうかなと思ったんですけど、あんまり震災で影響がなかった家の子たちは、やっぱり着せたいじゃないですか、普通に。せっかく用意もしてるし。だから聞いてみたら「着てくる子は着てくる」って聞いたので、じゃあそこは割り切って着せようと。そうやって何とか、体育館も使えなかったけど入学式らしきことをして。

うちの学校の特学さんは、情緒、知的、身体とか、あるじゃないですか。でもみんな一緒に見るからねっていう学校だったんです。それがほんとに私も好きで、助かるなと。だから5人の先生がいたら、5人全員が特学の子たちを見るからね、担任の先生だけじゃないから安心していいよって言われて、なるほどほんとにそうだったんですね。だから担任になったことがなくてもつながりができた。

橋　女の子がいるとどうしても女の先生が付くけど、みんな一緒にっていう時間が多ければ。

K　あと、体育なんかは普通のクラスに行って一緒にするので、そういうときはみんな一緒に、学年が一緒だったらこっちという感じで。ただちょっと残念だったのは、やっぱりなかなか馴染めないわけですよ、うちの子は。友達が作れない子なんですね。それは分かってたんですけど、小学校に入ったら子ども会もあるしっていうので、一応私もそれなりに地盤づくりじゃないですけど、近所の同級生の子たちのお母さんたちとしゃべってみたりとか、入るからよろしくねと。隠すことなく「うちの子は支援学級なんだ」と。そのお母さんたちも「ああそうなんだ」って、そんなに気にすることなく「よろしくね」って言っていたんですけど、そこから結局急に別な地区に移ることになって、移ったところはまるっきり分からなくて、聞くと、近所にあんまり子どもさんたちがいない地区だったみたいなんです。そこから地盤づくりするのは、私ももう力尽きてるし、そっちに力を注ぐ余裕がなくて、家のほうに力を注がなくちゃいけない。もう学校の先生に、この優しい先生たちに任せるって思って。

橋　やることいっぱいあるもんね。

K　そう、そのときはいっぱいいっぱいでしたね。最低限この子にしなくちゃいけないことだけをチョイスして、学校に必ず行くんだよっていうのを教えなくちゃいけないので、学校の送り迎えは必ずして。それ以外は、家のこととか生活……。おじいちゃんおばあちゃんの住んでたところのちょっと下に土地があったので、そこに家を建てさせてもらって、今はそこに住んでいるんですけどね。

橋　そっちのおうちでももう10年以上？

K　10年になりますね、そうですね。震災前とまるっきり同じで建てたので、家を建てるつもりなんかさらさらなかったんですけど、建てなくちゃ住むところがないので。でも、あの頃材料がなかなか調達できず……。

橋　材料もだし、大工さんとか左官さんなり職人さんがね。

K　やっぱりのんびりしてるとどんどんずれ込むから、うちの主人の家系が、段取りがすごい早いんですよ。子どもの障害のことでも、障害あるないにかかわらず、すぐ調べてああだよこうだよって、何でも先々。えっ早いんじゃない？って。私はのんびり派なので。

橋　まぁね、本人を見ながらという気持ちも……。でも、あんまり協力的じゃないご家族のこともいっぱい聞いてるので、ああすごいなって。

K　よく言われます。

橋　ご主人も調べてくれてっていうのがすごい。

K　何か気になったらしくて、やっぱり自分のお母さんの言うことだから、間違いはないかもって思ったんじゃないですかね。IT 系っていうか、そういう系の仕事してるのですぐ調べるんですよ、何でも。すぐ調べて情報収集して動く人なので、もともとがそういう感じなので、すぐに。でも私が逆に付いていけなかった。

橋　そうかー。

K　でも、付いていかなくちゃと思って必死で付いていって。でも「あのときこういうふうにしてたから良かっただろ」っていまだに言われるんですけどね（笑）。

橋　いまだに（笑）。それは言うんだな。

K　それは言うんです。初めの頃は時々チクチク言われましたけど、でも今となっては水に流して「確かにそうだね」と言って。そのおかげではいますけどね。そんな感じなので、震災には遭ったものの結構恵まれて。だから、私の話が参考になるのかなという……。

橋　いやいや。

K　そして、肝心な子どもが無の状態だったので、あの子の感情がやっぱり分かってないので。

橋　でも、普通じゃない状況にドカンと入ったからそうなったので……。

K　そこで変わったので、ある意味、すごいプラスに捉えると、震災がなかったら今でもおじいちゃんおばあちゃんダメだったかもしれないし、いまだに「黄色黄色」とか「あれ食べない、これ食べない」って言ってたかもしれないって思って、そこはプラスに考えるようにはしているんです。

橋　震災のおかげっていうところは、あるかもしれない。

K　ただ、やっぱり怖い思いはしたので、いまだに音とかはダメですね。あと地震もちょっと揺れるだけでパニックになる感じがあるんです。

橋　そこはしっかり記憶に刻まれてるんですね。

K　だんだん成長してくる過程で、同じことを言うにしても、うちの子が納得する言い方とか言い回しで伝えるようにしていて、理解するとなんか分かるみたいなんです。ただ、自分が納得してないとやっぱりダメで、だから、どう言ったら君には伝わるのかなっていう方法を……。

橋　すとんと落ちるみたいな。

K　そうですそうです。それを手を変え品を変えいろいろやって、何とかやってきた中で、やっぱり震災、それで少し成長してきたんですかね。いろいろ食べられるようになったのも特学の先生のおかげだし、その先生も手を変え品を変えでいろいろやってくれて、食べなくちゃいけないんだ、食べないと体壊しちゃうんだとかっていうのが、すとんとどこかで入ったときに、物を食べるようになったりとか。学校というのは絶対行かなくちゃいけないんだよっていう、根性論じゃないですけど、でもほんとにつらいときは言ってねとか。そういうことを、母子通園してたときにも勉強会とか参加させていただいて、自分も知らない子育てがいろいろあって。やっぱり自分がやってきたこととは違う子育てじゃないですか、全然。

橋　探り探りですよね。

K　自分をベースにしちゃいけないし、あと周りからいろいろ聞くけどもそれも全部鵜呑みにしちゃいけない。やっぱりその子を見るっていうのを教えてもらって。だから勉強会の中で話はいろいろ聞くけども、大事なのは子を見て育てることだっていうのは学んだので、そこからはおかげさまでちょっと成長してくれて。

橋　お母さんすごい。

K　すごくないです。ほんとに人に恵まれたなって、そのときの先生方にもほんとに感謝しても感謝しきれないくらい。今もそういう支援のところに、デイサービスとかも行ってるんですけど、そこには幼稚園より下のときからずっとお世話になってる先生もいるんですが、こんなになったか、みたいな。だから今は全然心配することなく「もう勝手に行ってこい」っていう。子どもも心配することなく「今日何々先生だったよ」って。行きたくないっていうことなく行くっていう流れが、ほんとにありがたいことに人に恵まれました、うちはね。でも、つらい思いしてるとか大

変な思いしてるお母さんたちもたくさんいるのでね。

橋　どういう状況になっても、そこはやっぱりお母さんのかじ取りがすごく分けるし、本人は状況が分からなくて何とか保とうとしてるところで、周りが取り乱してしまうとよくないから。そこでお母さんが一生懸命されてて、まずとにかく地盤をしっかりして、義実家で、本人も置いていって大丈夫だっていう感じになって……。

K　元の家は見せなかったです。津波に遭った家は絶対見せない。でも、ある程度片付いてちょっと見栄えがよくなった頃に、解体する前に一回連れてって見せて、そこで「君のおもちゃとかもこういう状態だからもうないんだよ」って。口で言ってもやっぱり分からないから、見せて納得させないと、この子はきっとずっと心に残るだろうなと思ったので。ただ、ほんとにひどかった状態は見せたくないなっていうことで。

橋　泥が入っているようなところとかね。

K　そして、電車が好きな子だったんですね。プラレールをすごくいっぱい買ってもらってて、おじいちゃんもパパも初めての子どもだし、学校の机も「うわー、俺の机」って言って喜んでたんですよ、ランドセルとかもね。だからそれももうないんだよっていうのを、一応ちゃんと自分の中に落とさせなくちゃなと。

橋　視覚的に見せて。

K　そうです。見たときは、そのときもやっぱり泣くでもなく騒ぐでもなく、黙っていましたけど、たぶんそこで分かったんじゃないかなって。小学校の中学年くらいになってスマホとかいじれるようになってくると、あとはテレビで震災のニュース流れるじゃないですか。見たくないじゃないですか。でも、あの子は逆に見るんですよ。ニュースとかすごく好きで、そういうのを見て、ああ、こういうふうになったところもある、俺のところはこうだったって。そのときからすごくニュースを見るようになって。

橋　津波映像みたいなのとかも見ます？

K　見ますね。自分でスマホで見たりするんですけど、逆に私はもうトラウマで聞きたくないから「音は消して見て」って。でも、見ちゃダメっては言えないので。

橋　彼は津波を見てないから。

K　そうなんです。映像で見ることで、自分の家はこんな感じでこうなったのかなっていうイメージを作って、納得したのかなとか思うんですけど。いっときすごく見てましたね。今は見なくなりましたけど。あと、その後少しずつ生活が落ち着いてくると、やっぱりまたおもちゃを買ってきてあげたりするわけです、前みたいに。記憶力がいいので「あれがあったけど」とか、全部覚えてるんです。

橋　覚えてるでしょう。

K　何歳のときに買ってもらったとか、何歳の何月に買ってもらった何とかって、あれもなくなったとか。でも、2階にあったものは辛うじて少し残っていたし、あと津波で泥にかぶったやつをパパが拾ってきてくれて、井戸で洗ったんです。結局使えないんですけど、そういうので「これはつながんない」とか言いながら遊んでたり。でも、ちゃんときれいに駅とかも並べたなと思ったときに、「津波ー」って言って、ワーって。それが私は、え、何でそういう遊びするのって初めは思ったんですけど、後々テレビとかでよく「子どもがそういうことするのは止めちゃいけない」って聞いて、止めなくてよかったと思ったんですけど。それは子どもの中でストレスを発散するためで、必要なことだからと言ってるのを聞いて、あーそうだったんだ、あのときあの子がああやって遊んでたのはそうだったのかって、後から思ったりも。

橋　止めなくてよかった。

K　しばらくして、またやらなくなる。だからある程度ね……。それから音とかサイレンとか、ちょっとのことでもすぐ警戒のために鳴るんですね。やっぱり海なので、地震が来るとすぐ津波情報とかサイレンとか鳴るんですけども、そうすると、やっぱりワーってなるんで。でも外ではやらない。外と中の線引きをする子なんですね。だから、誰かがいるところではやらない、うちだからやるみたいな。よくも悪くも、うちの子は外ですごくいい子なんです。「いい子だねいい子だね」ってすごく言われるんですけど、家では決していい子ではないです。

橋　ちゃんと場で……。

K　そうなんです、その場その場で。でもそれって猫かぶりですから、やっぱり出るじゃないですか。どっかで出るよーって。

橋　いや、でもそれは場なんですよ。うちの息子もそのタイプですね。場で違う。

K　ボロが出てないですか？
橋　いやなんか、うちはまたちょっと重いので、例えばスーパーとかで保育園の先生に会ってしまうと、ははははっ、あ、違う違う、あり得ない、みたいな。
K　ああそうなんだ、会う場所が違うみたいな。
橋　そう。立派に振る舞うんですよ。「ああ、先生ごめんなさい」みたいな。
K　やっぱりその子その子の特徴がありますよね。
橋　紙芝居のように「保育園です、保育園の先生たちがいて、この子たちがいて。はい帰ってきました、家の中です」って。保育園の先生たちが家に帰ってっていうことが想像できないし、その頃は受け入れられなかった。そこでたぶん彼にとってはなくなる。はい次の人、的な。そのぐらいしかまだたぶん理解の容量がなかったんでしょうね。でもだんだん、先生たちにも家があって家族がいて、君にも実家に、お父さんのお母さんとお父さんはおじいさんとおばあさんで……とか、やっぱり書いて、少しずつ少しずつ。一生分かんないかもしれないけど、やってましたね。
息子さんは病院とか大丈夫な人です？
K　小さい頃から慣れさせました。こういう子は初めが肝心なんだって思って、歯医者さんも床屋さんも小さいうちに。そういうことも理解してくれるっていうか、分かってくれる方のところをいろいろ情報収集して、行って。
橋　説明して。歯医者さんも、虫歯ができたときに行くから、初回が痛い治療だとね。だから虫歯ができる前に。
K　なので、痛くないときから行く。その病院の先生は利府支援とかにも行っている方で、理解のある先生だったので、「初めは診療台も乗らなくてもいいよ」って、待合室みたいな和室があるんですけど、そこで遊んでるところに先生が来てくれて「診るからね」って、そこから始まって、徐々に徐々に。
橋　いい先生だ。
K　ほんとに私は人に恵まれました。今でもそうです。
橋　それはちゃんと情報収集してるから。ちゃんと最初に嫌な体験をしないように、虫歯ができる前にとか、小さい頃から病院も慣れさせてとかって考える方は、そうやってちゃんと動くし。
K　でも、やっぱり子どもさんによっては、同じように動いてもダメな子もいますからね。とにかく勉強会は行きまくりました。でもあっちで言ってたことと、こっちで言ってたことがちょっと違うなとか。ここは一緒だからここは合ってるんだなとか、それをちょっと挑戦してみようとか。
橋　人によって結構違ったりもするし。私も TEACCH（註：自閉症及びそれに準ずるコミュニケーション課題を抱える子どもたちのためのケアと教育）の勉強会だったりとかほんとにいろいろ。息子を保育園に入れてからは、保育園時代が一番時間が取れたので。
K　そういうときに動かれるんですね。
橋　私、保育園のときに車の免許も取ったんです。
K　そうだったんですか。
橋　私が免許を取らないと、息子の通院の関係でどうしようもないんだなって、免許取るしかしかないんだって思って。
K　でも、それで動くからすごいですよ。免許取るのだって時間かかるじゃないですか。結構時間を割いて。
橋　教習所が保育園の近くにあったんですよ。うちは年少から入って保育園に 3 年間通ったんですけど、最初の 2 年間はとても理解のある園長先生で、「お母さんいいよ、大変だから、もし働けなければ一筆書いて出せば大丈夫だから、相談とかもこういうところもあるから、相談も行くといいよ」って。仙台市がやってる相談に行けば記録が残るし、お母さんが大変なんだっていうことを一筆書けば、全然大丈夫だったんです。だから教習所通いもできて、免許を取って。
K　でもいざ怖かったんじゃないですか。でもやっぱり必死ですか。
橋　必死ですね。
K　必死だと怖いものがないですよね（笑）。
橋　自分のためじゃないから。自分のためだったら頑張れないけど、子どものためなので。
K　そうですね。
橋　最初は実家の車を……。
K　分かる（笑）。

橋　古かったので、もう傷つけてもいいやぐらいで（笑）乗り始めましたね。

K　うちは、そうは言っても義理の父母じゃないですか。義理の姉夫婦もすぐ目の前に住んでいるんですよ。お友達曰く「すごいところに建てちゃったね」って言われる（笑）。慣れるまではやっぱり「何ですと？」っていうこともいろいろあるんですけど、やっぱり必死なのでね、そんな聞いちゃいられない、右から左、右から左ってやってるうちにもう今日に至って、今ではもう……。

橋　もしかしたら、そのタイミングじゃなければ、そうはなってないですよね。

K　そうかもしれないです。やっぱりタイミングなんですかね。でも私、子育ての中で少し失敗したなっていうか、反省してるのが、息子に友達がいないんですよ。友達の定義ってどういうのかよく分かんないんですけど、やっぱりコミュニケーションが苦手なので……。まず、結局子ども会に入らなかった。最終的に 6 年間入りませんでした。それは大きかったかなって思って。別に近所で隠すつもりも何もなかったんですけどね。コミュニケーションの仕方が……たぶん、きょうだいとかいればいいんでしょうけども。

橋　それはほんとに私も思います。

K　同じ学年とか、子ども同士の関わりができなくて。年上の人は大丈夫なんですよ。上の人たちからはすごいかわいがられるから、年上キラーなんです。でも、同学年の子たちとは全く話も合わないし、興味も合わないし。だから今、出掛けて歩くのも 1 人でぶらぶら。デイサービスに行けば、先生は話を合わせてくれるのでとても気持ちよく行きますけど、やっぱり自分の発信、コミュニケーションの場をあまりつくってあげられなかったんです。一生懸命いろんな情報収集して、先走っていろんなことをやってきて、成功した、ああよかった、それでここまで成長したとは思うんですけど、ことコミュニケーションに関しては、うちの主人もあんまり口数が多い人じゃないので、かわいがってはいるんですけど、だじゃれを言うでもなければふざけるわけでもなくて、真面目なタイプの人なので、夫婦でも会話は細々っていう感じなので。ほんとに会話するスキルが全然ないまま来ちゃったので、いまだに会話の仕方が分かってないな。あと、相手のことを考えるっていう体験ができなかったんですよね。おじいちゃんおばあちゃんもこっちに合わせるじゃないですか。そうは言っても子どもだし、って許しちゃったりとか。

橋　でも、十分だと思う。それは本人が選んでると思います。決してお友達といたいわけではない。

K　そうなんです。今はもう開き直って、この子は 1 人が楽なんだなって。前は無理して行動支援さんを付けて、そうすればもうちょっと練習になって、高校も寄宿舎があるところをあえて選んでとか……。

橋　どこですか？

K　小牛田高等学園。

橋　ああ。1 年目が全寮ですよね。

K　そうです。

橋　2 年目からは寮ではない？

K　家が近いので。そうは言っても小牛田と塩竈なんですけど。

橋　近くはないよね。

K　でも、ほかの生徒さんと比べると近い。

橋　あ、ほかはもっと遠くから。

K　そうなんです。だから、ほかの遠くから来てる子たちは優先して 3 年間入ってたりするんですけど、うちの子は 2 年目からもう出る。

橋　大体 1 年生のときにみんな寮に入るって聞いてました。

K　全員がそうなんです。

橋　見学に行ったこともあったな。

K　ところがそのときコロナというものがあって。うちの子はほんとに節目節目に必ず、小学校のときは震災で、中学校、高校に入るときはコロナで。

橋　えっ、中 3 ぐらい？

K　中 3 です。だから、卒業式見てないんですよ。うちの中学校は、卒業式は保護者もダメって言われて、子どもたちと先生たちだけで卒業式をして。

橋　ほんとにドカンと当たってるんですね。

K　当たり年の学年だったんですね。だから寄宿舎に入るのも遅れて。ただでさえ私はもうその1年にかけて、その1年の中でコミュニケーションを頑張ってスキルアップしてほしいと思ってそこを選んでいたのに、入寮が遅れ、寄宿舎に入ってる時間が通常より短いまま終わってしまった。

橋　ずれ込んだけど、終わりは3月？

K　そうです。次の年の子たちがまた1年生で全員入るので、総入れ替わりになる。

橋　スライドして中途半端にっていうことはできないんだもんね。3月までなのか。

K　女川さん（女川高等学園）とか岩沼さん（岩沼高等学園）のように、3年間入れるところだとまた違うんでしょうけど。そこも全部見学に行って。あの子が入る学校だからあの子が決めるっていうときに、本人が「小牛田がいい」って決めたので、入ったんです。入ったっていうよりも入れたからよかったんですけど。

橋　すばらしい。

K　そこでまたコミュニケーションスキルを学ぶチャンスを逃し、でもその短い中でも友達を作る子たちは作るんですよ、上手にね。今でも、卒業しても会ってるよーとかね。私は結構ママ友とか作りがちの人なので、「うちの子は何々くんと何々だよー」って聞いて、いいなーって。「うちの子も混ぜて」って言いたいけど、本人が混ざりたいと思ってないと意味がないので、それは言えないので。

橋　そうそう。そこはやっぱり違うんだよね。

K　一応卒業のときに、何人かとLINE交換はしたみたいです。でも「LINEしてたの？」って言うと、「うん、こないだもLINEしてみた」「見てもいい？」「いいよ」って、何も考えないで「いいよ」って、見せてくれるし、勝手に見るしみたいな（笑）。

橋　そうなんだ（笑）。でも、見せてくれるのはすごい。

K　でも「元気で頑張ってますか」「頑張ってるよ」……終わり、みたいな（笑）。

橋　続かない（笑）。

K　そう、続かないんです。で、宿舎の先生にも、ほかの先生にも在校中に「この子はコミュニケーションが悩みで」ってずっと言ってたら、その寄宿舎の先生が卒業のときに「俺がLINE交換していい？」って言ってくれて「もうぜひー」って言って、LINE交換してくれたんですけど。で、あの子もう宿舎になんか入ってないのに、行くんですよ。大掃除の日とか行ったり、だから重宝されて「今年も呼ぶからねー」みたいな。そういうのをする子なんです。1人でも行ってお手伝いしてくる子なんです。

橋　やっぱり、それは彼が選んでる。その人とは会いたいだろうし、役に立っている感じもうれしいだろうし。

K　ね。でも寄宿舎に入っている子では誰も知ってる子いないし……。

橋　いやいや、たぶんほかの子に会いたいわけじゃないですよ、彼はきっと。

K　そうなんですよね。だから不思議な子だなと思って。同学年の子で寄宿舎に入ってる子もいるわけですよ。その子たちにも、夏休み中だけど来る人はぜひ来て掃除手伝ってくださいっていう感じになってて、1年生は強制なんですけど、その同学年の子たちが行くのかなと思ったら、行かないんですよ、みんな。ちょっと用事あるとかって。だから「寄宿舎入ってないのにお前だけだよ、行くの」って。

橋　（笑）行きたいんだ。

K　楽しくて行くんだろうからいいけど。

橋　その先生がいいんだな。

K　でも、その先生も今年異動になってしまって、もういなくなっちゃったんです。だから連絡をする理由もなくなり。そうやって人に恵まれてきたけれども、うまくそれを使ってこれなかったな、導けなかったなーと思ってね。

橋　それはすごく分かります。何とか友達を作ってあげたいと。

K　一人っ子だと、なおさら。

橋　思っていたけれども、本人が求めてないっていうことがはっきりと分かってきたし。ああそっか、本人が求めてないのに……。

K　でも、後々どうするんですか。

橋　今はうちはB型の事業所に通ってて、実はグループホームに入ったんですよ、この4月から。入ったばっかりなんですよ。

K　ちゃんと考えて動いてらっしゃるんだ。

橋　もちろんたくさん見学も行って。ああ今はこういうところができてて、積水ハウスとかの1階10部屋、2階10部屋みたいなところはもう結構いっぱいできてるんですね。新築だし、こういうところに入れたらいいなーって。例えば1階は女子で2階は男子、リビングがあってとか。もしかしたらその住人の中で1人波長が合う人がいるかもしれないし。いいなーって思ってあちこち見て歩いたけど、結局入ったところはそういうところではない（笑）。

K　あ、じゃあ今、一緒に住んでないってこと？

橋　住んでない。古い家をちょっとだけ直したぐらいのグループホームで、定員が4人のところに入りましたね。

K　4人なんだ。あーでもやっぱりそうやって動くのが‥‥でもタイミングがあるので……。

橋　もちろん無理やり家を出るわけにいかないので。

K　そうね。ただいずれはきっと……。やっぱり一人っ子のママ友さんはみんな心配になるんですよね。それで「どうする？」「どうなんだろうね」とかって。でもみんな同じような情報スキルなので、みんなで「どうだろうね」って。でも一人のお母さんが早々と、通ってる作業所さんの系列のグループホームが新しくできたからって、今日は1泊、今日は何泊って少しずつ慣らしていって、その子はもう安心だねって。だからやっぱり、いいなーって思って。うちはどうしたらいいか……。

橋　そう、うちはどうなるんだろうーって思うじゃないですか。今でも思ってます。うちはそういう系列の、通所さんと関係のあるところとかでは全然ないんですね。通所先はグループホームを作ったりするところじゃないので。それがもう分かってたから、そこには期待はできない。っていうことは、探さなきゃなんないんだなって思いながら、ショートステイを利用しながらやってて、なんかタイミングで紹介っていうか、相談支援の人が「何かできたよ。見に行きますか？」って言ってくれたので「行きます」って言って、本人を連れていってみて「やってみる？」って。それで何回も何回も体験して入ってみたけども、ほんとにチャレンジですね。まだハラハラですよ。全然ハラハラ。

K　そうか……。

橋　本人が「そろそろ帰るよ」って言うかもしれない。「ううん、ショートステイじゃないのよ」って。どこまで分かってるかなっていうぐらい、うちはほんとに知的に3歳ぐらいなので、療育手帳もあるし、支援区分も5で重いほうなので、だから支援も受けられる部分があるんです。手帳ってあります？

K　あります。

橋　A？

K　B。

橋　福祉サービスの支援区分とかはあります？　例えばヘルパーさんを使ってたりとかはします？

K　使おうと思えば、市に申請すればいいみたいなんですけど。でもまだ申請をしてないので、今使ってるのはそのショートステイだけ。短期入所とかそういうことじゃなくて、私、あんまりそういうの詳しくなくて、相談員さんがいるのでその方が定期的に来てくれたときに「今悩み事ある？　どう？」みたいな感じで。

橋　受給者証ってあります？

K　あります。

橋　あるんですね。じゃあ支援区分されてますね。

K　2歳のときから通ってるので、もう歴は長いので。あっちもこっちもじゃなくて、同じ系列のさわおとさんにずっと。初めはさわおとさんじゃなかったんですけど、途中でさわおとさんが参入してから、ずっと。

橋　さわおとは全部あるから。

K　ね。少しずつ拡大していってくれてるので。

橋　グループホームもありましたよね。

K　あります。ただやっぱり、もっとほんとに心配な親御さんたちもいるので……。

橋　もちろん待ってる人たちがいるから。

K　言うても息子は、取りあえず寄宿舎でも全然けろっとしているし、そこでまず生活は一応学んできたので。自分でも「俺がこの家を守るから」みたいに勝手に言ってるんですよ。お前、守るって簡単に言うけどどういうことだか分かってんのかっていう。今おばあちゃんもそうなんですけど、入浴介助だけとか、買い物だけとか、そういうのを使いながら住むっていうイメージ。でもそれだと絶対孤独死みたいな……。私も迷走中なんです。

橋　でも、やり方はあるだろうなと思う。自宅にいてサービスを受けるっていう方法も。
K　できることはさせないと、ほんとにサービスを必要としている子たちが入れない、そこにうちが無理に行かせることによって、ほんとに行かせたい人が行けなくなるのはちょっと違うんですよ。
橋　でも、本人がどういうところがいいだろうなってイメージがあれば、順番とかは、どうだろうな……。
K　本人は「今の家を守る」しか言わないですけど、でも、この家は無理だから。
橋　でも、そういう感じでショートも行くことは行くんですよね。泊まれるスキルがあるし。
K　そうですね。
橋　それはこれから本人が、一人暮らしみたいなことがあるんだって知って、自由にやってる人がいるんだっていうこととかが分かったら、気が向くかもしれないし。ほんとに家でやってもらえる方法もあるので。
K　体が丈夫な子なので、今まで病院って通ってなかったんですよ。薬も飲んでなかったもんですから。でも手帳とかの更新をするときに必要になってくるのにあたって、今までは児童相談所の系列のところに行ってたんですけど、19 歳で子どもじゃなくなったので、急に「こっちはダメですよ」って言われて、「えっ、病院ないんですが」って相談員さんに相談したら、塩竈市の精神科病院があるからと。あんまり……と思ったけど、そこしかないからしょうがないって行ったら、いろんな情報が載ってて、アパートもあるんだって知って。そういう障害のある人たちが入るアパートをやってる。それも最近初めて知ったので、これはって思って、そこを一つ視野に入れながら。
橋　情報収集して。
K　ところが私が今、ママ友さんとも全然会ってないっていう状態で、学校卒業すると、勉強会系も全然……。
橋　みんなそう。卒業するとみんな全然会わないの。だから情報がない。みんな言ってます。
K　そうなんです。そうとはいえ、私もサークルには入ってたんです。塩竈市でやってるところとか入ってたんですけど、目下介護中なので、それで一回休会するねって言って、行ってなくて。
橋　そう、貴重なそのお時間を……。
K　脱線してますよね。震災の話じゃなくなって……。
橋　いいよ、大丈夫。大事な話なので。
K　そうですかね。いつもそうやって脱線ばっかりして、何話したいの結局っていう（笑）。

橋　ちょっと話を戻してもいいですか。じゃあ、震災のときが 6 歳なんですね。
K　6 歳になる年。
橋　幼稚園の年長の年ですね。一軒家に住んでいて。地震のとき息子さんは保育園にいたんですよね。
K　はい。帰るのにバスに乗った途端に揺れたんですって。
橋　バスが出てなくてよかったー。
K　そうなんです。そのまま園庭に戻ってきたそうです。
橋　母は歩きで行ったんですよね。
K　はい。
橋　そこで息子さんに会えて、その日の夜は？
K　おじいちゃんとおばあちゃん家に。19 時ぐらいかな、だいぶ暗くなってきた頃でしたけども、何とか送ってもらって。行くまで大変でしたけど。
橋　夜、バスの運転手さんが連れていってくれた。
K　そうですね。あのときワンワンバスがなかったら、きっと乗らなかったと思う（笑）。
橋　（笑）。
K　ワンワンバスさまさまです。でもワンワンじゃなかったかもしれない……私もちょっと記憶が定かではないんですけど、そういうキャラクターバスだった。
橋　よくありましたよね。そういえば、そういうの最近見ないですね。
K　あんまり見ないですね。ネコバスとかね、あったんですよ。
橋　懐かしい。

橋　学校が少し遅れて始まって、その後、息子さんは震災前と何か違う様子って出てたりしました？　震災のときっ

て、やっぱり分からない状況だから、ちょっとおとなしくなるっていうか、たぶん本人がその状況を受け止めるので精一杯だったんだと思うんです。うちもすごいおとなしかったんですよ。どんどん口数が減っていって、どんどん動かなくなってしまって、表情がなくなっていっちゃう感じだったんです。暴れなくて、パニックを起こさなくて楽ではあったけど、どうしようって。何も楽しいこととか、趣味的なこととかがなくて、うちは新聞のチラシとテレビのコマーシャルが大好きだったんで、両方なくなってしまって。

K　そうか、あのとき新聞も届かなかったですか。

橋　新聞だけは来たけど、チラシがない。本人にとって肝心のチラシがないし、CM はもう全部 AC ばっかりになってしまったし（註：震災後は通常の企業 CM の放送が見送られ、その空白を埋めるために「公益社団法人 AC ジャパン」の CM が繰り返し放送された）。

K　そうでしたね。あのときね。そうでした。

橋　だから、本人の好きなものを何も与えてあげることができなくて、何で心理的な拠り所を作ってあげられていなかったのかなって。やっぱり作ってあげたくて探してはいたんだけど、見つけられてなかったし。例えば外でみんなとできるものと、家で 1 人でも楽しめるものを、何でもいいから作ってあげたいってすごく感じたんですよね。そういうタイミングで、障害者センターで書道の体験教室があったので、連れていってみて、今に至るんですね。

K　あーなるほど、やっぱりそうなんだ。

橋　本人がやっぱり、普通のところはとてもじゃないけどできないですよ。だけど、障害に理解のある先生で、割と自分が行き慣れてる障害者センターでだったので、すんなり行ったんですね。

K　すごいねー。

橋　学校が始まってからちょっと落ち着いた頃に、睡眠リズムとかに何か出るとか、そういうことはなかった？

K　特になかったと思うんですよ。ただ私たちもいっぱいいっぱいだったから、見えてなかった可能性もあるんですけど。

橋　そういう大きく出るようなことはなかったんですね。「お母さん行かないで」って引き止めることもしないし。

K　ないですね。学校がね、先生がすごく良くて、学校が楽しかったみたいなんです。先生も学校の様子をほんとに事細かく、写真入りで、やっぱり絵で見せたいっていうのがあるので、連絡帳とかも丁寧に細かく書いてくださって、親も見るだけですぐ様子が分かるし。だから、学校がまず楽しかったから、まず楽しい場所があったっていうのはあると思うんですね。

支援学級の先生も、すごく理解があるというか、1 人の先生が、お子さんに障害のあるお父さんだったんですね。だからよく理解があって、何をしてあげるのがいいとかっていうのが分かってくださってる先生だった。プロフェッショナルなところで勉強してきてくれた先生方もいるし、もともと分かってる普通の教員の先生もいる状態だったので、ほんとにあのときは最強だったな、って今でも思って。

橋　よかったね、スタートがそうで。

K　そうなんです。まぁ 6 年間ですから、長い間に、ん？という人も。やっぱり人なんですよね。でも文句も言えないしね。

橋　でも、1 年生がほんとにいい先生たちで、最初から息子さんも割と楽しめた。

K　楽しめましたね。

橋　人数も少なかったしね。

K　そうですね。国語とか算数とかの学習のときはぴっちりパーテーションで区切って、その子その子のペースでやってくださって、子どもの人数も少ないから、先生も時間で区切って、何分かはこの子、何分かはこの子っていうふうに、しっかり見るところは見ていただいてっていう感じだったので。だから学習面でも心配なかったし、全然勉強しないでお出かけしたりも。大きくなったときに公共の乗り物の乗り方とかも覚えたほうがいいとかそういうのもあって、校外学習が多かったです。あと、ガス局の隣に何かありますよね、お泊まりできるところ。ああいうところにお泊まり。

橋　そこが宮城県の障害者センターで、うちの息子が書道を始めた場所です。

K　あー。ジョブコーチさんも入ってますよね。私もうちの子が就職するときにジョブコーチさんをお願いしたので、あそこは結構うちもご縁があって。プールは違うのかな。

橋　プールも近い、隣にありますね。
K　そうですよね。プールに行ったりとか、そういう活動をすごくしてくれて。だからうちの子が今１人で電車に乗るのもバスに乗るのも全然平気というのは、そこで培われて、外に出るのが全然苦じゃなくて、公共の乗り物に乗るときは騒いじゃいけないとか、こうしちゃいけないっていうのも、もう小学校のときから刷り込まれてきたので。だからほんとに、大人になったときに使うスキルをいっぱい組み込んでくださったんです、小学校のとき。
橋　それが大事なんだよね。
K　でもやっぱり先生によっては……学習が大事っていう先生がいると、「全然聞いてないですよ、うちの子」って言うけど、淡々と授業を進める先生とかいらっしゃるんですよ。
橋　いろんな先生がねぇ。
K　それが教員なんだなって、しょうがないよって。でも同じクラスの子は、その１年間だけ記憶がぽっかり抜けてるんですって。「あの先生の１年間返してほしい」って。
橋　楽しくなかったんだね。
K　全然記憶ない。たぶん、ただぼーっと１年。
橋　ただいただけ。
K　そうですね。うちの子は、一応記憶はあるみたいなんです。でも身にはなってない。何かスキルアップしたかというと、その１年はなかったなって。
橋　でも、そういう人もいるんだってことを学んでるからね。
K　そうですね。世の中ね。
橋　彼らはすぐ人を読んじゃうから、分かっちゃうから。
K　そうですね。上手ですよね。
橋　そういうところで過ごすっていうことも体験してるから。
K　ある意味大事な１年でしたかね。そういうこともしながらね。
橋　そして、震災のことをその後に自分で知りたくなって、映像とかを自分から見てるから、私はそれはほんとにすごいと思うし、OK だと思うんです。
K　私は「なぜかける？」って思いながら、茶わんを洗って、聞きたくないんだけどなって。
橋　それはちゃんと場も分けてるから、外ではやらないだろうし。
K　そうですね。家だけ。
橋　外だったら、やっぱり嫌な思いをする人が周りにいるかもしれなくて、何だよって思われる部分もあるかもしれないけど、家でやる分には。
K　でも、家と外のギャップがひどすぎて、それで分かってもらえないんですよ。
橋　うちもそう。そうなんですよねー、そうなんです。
K　なんだこのって思う。家ではこんな……。
橋　そうそう、全然大丈夫じゃない的な。
K　勘違いされるんですよ。
橋　うちは全然ほんとに大丈夫じゃないから、支援区分出すとか査定とかのタイミングは、家でやるのをやめた。家だとお母さんがいて安心できてしまうし……。
K　家でもできるんですか。
橋　うん。なんかそういう人が来たときに「いらっしゃい」とか言ったりするし。
K　普段言わないのに。
橋　そう。おとなしくしてたりするし、こんなのじゃすごく軽くつけられちゃうから、やばいなって。「普段こうじゃないです」とかって言っても……。だから次からは学校だったりとか、作業所に入ってからは作業所のほうに見に行ってもらって、私がそっちに行くっていうふうにしたんです。うちって実は最初は、生活介護と B 型と両方あるところに入ったんですね。どっちなのかちょっと微妙な人なので。判定は生活介護でしょうっていう人なんだけど、生活介護だと、動き回る人もいたりするし、叫ぶ人もいたりするし、他害がある人もいるし、本人にとって悪い見本がいっぱいあるんですよ。すごく引きずられちゃう人なので、本人的にすごく頑張らなきゃならなくても、いい見本がある

ところに置かないとダメだなっていうことが分かってたから、じゃあ両方あるところにしようって。入るときにもちろん体験とかもして、「どっちなのか迷ってるんです」って。「判定的には生活介護って言われる人なのは分かってるんだけれども、よい見本の人たちのところでないと、作業とかもちょっと難しいと思います」っていう相談をしてて、そのときの施設長が「分かった、B 型で俺が見るから」って言ってくれてたので、「じゃあお願いします」って。

K　どっちでも選択できるってなると安心ですもんね。そのときにどうするか。

橋　まぁ自由に移ることは仙台市はできないんだけど。

K　そうなんですか。私分かんなくて。

橋　だけど、会議とかにかけられた後に、生活介護に移るとかっていうこともできなくはないからって頭で入れたんだけれども、その施設長さん、割とすぐいなくなっちゃった（笑）。ちょっとトラブルぐらいな感じで辞めてしまって。入って 2 年ぐらいして、B 型を閉めますっていうことになったんです。

K　そういうこともある？

橋　あるんですねー。それで、うちは生活介護だけにしますけどどうしますか？ってことになり、その施設さんに対してちょっと不信感もあって、でもやっぱり簡単に移れるものではない、希望してもダメかもしれないから、「分かりました、ちょっとほかの B 型も探してみます」って。それが 11 月かな、1 月だったのかな。すごくひどいタイミングで、新卒の子たちが全部決まって枠が埋まった後っていう、ちょっとあまりにもタイミングがひどかったので、相談支援の人が「もし生活介護とかで、この施設に入れたいとかっていうことがあったら、仙台市と掛け合うから」「会議とかはもう全部終わってるけど、ちょっとひどい事例なので、入れてもらえるように働きかけますから」ってやってくれて。コロナだから体験もなかなか受け入れてもらえなかったんだけど、その中で受け入れてくれたところに体験もして。それで私は、割と近くの生活介護がいいかなって、新しいし人少ないしって思ってたら、本人が「絶対行かない、こっちの B 型に行く」って。何とか誘導しようとしてもダメで（笑）、「絶対こっちに行く」ってなったので。

K　本人は B 型とか生活介護とかっていう、そういう括りでもないですもんね。ただ、自分がどっちがいいか……。

橋　そう。人とか場所とか。場所ってたぶん建物ですね。でもたぶん一番は人。きれいな女の人がいたんですよ（笑）。

K　それは勝てないかー（笑）。でもまた移っちゃうかも。

橋　そうそう。うわっと思ったけど、本人の意思が強かったし、じゃあ 1 年こっちでやって、その間また私が必死に探さなきゃならないかもしれないけど、本人が望んだことを一回かなえようと思って。ちょっとご迷惑をかけるかもしれませんがお願いしますっていう話で入って、入ってからもすごくご迷惑をかけて、ちょっと困りますねって感じだったんだけど、それでも行かせてた。送迎も「ほかの人たちがみんな一緒に乗りたくないって言うんですよ」って言われたり。

K　何で？　騒いじゃうの？

橋　独り言とかが止まらないぐらいの人なんです。

K　うちも独り言は言いますけどね。

橋　主に精神障害の人たちが多かったので、精神の方たちは結構それがつらいと。彼らは「つらい」とか「ユウヤさんの声が嫌だ」とか言えるので。ユウヤはそういう肝心なことは言えないけど、独り言を言ってたりするので、そういうこともあったけど、それでも行かせてた。

K　でも、本人は行きたいんですもんね。

橋　本人が行くって言うので。建物はほんとにただの箱型なんです。その一番奥の給湯室をちょっと本人の居場所みたいに、机とかライトとかをしつらえてもらったら、そこに落ち着いて。いやいや給湯室だけど……って思うけど、でも本人がそこで落ち着いたので、周りの人もしょうがないなって。こっちでうるさくされるよりも、そっちのほうが周りの人にとってもいいから、お互いに何とか。本人がすごく集中してできる作業も見つかったので、この形でやっていきましょうっていう感じで、そこから落ち着いたのかな。通い始めて 2 年になりますね。

K　せっかく行きたいって思ってる気持ちをへし折るのはちょっとね。

橋　まぁそれでもまた、例えばその女の人が……（笑）。

K　人が代わったり、環境は変わるものですからね。

橋　そうそう、辞めてしまうとかそういうことがあったときに、おそらく本人がつらくなったりとかしたら、また次を探さなきゃなんないかもしれないけど。

K　それの繰り返し、うちもそうです。いつまで続くか分かんないです。

橋　そうそう。でも君が選んだんだからっていうことで、今はそっちに行ってますね。
K　うちも保険じゃないですけど、無理だったら無理で、そうなったときにどこに行けばいいかっていうのはもうちゃんと、ここだよって決めてある。それを本人にも伝えて。もし母親が年取って……私も結構年取ってから産んだので。
橋　私も同じです。えっ、たぶん同年代じゃないかと思います。ちょっと私のほうが上だと思いますけど。
K　そんなことないと思いますけど。昭和 43 年です。
橋　4 つ上です、私、39 年です。
K　えっ、分からない。私、姉がいるんですけど、姉と同じぐらい。でも姉より全然若い。
橋　いえいえ、もうボロボロです（笑）。
K　だから、私もいついなくなるか分かんないから、やっぱり全部教えておいて。分かってるか分かってないか分かんないけど、行けるか行けないかも分かんないですけど。
橋　できることはね。
K　ここに行くんだよ、この人に頼るんだよっていう一覧表みたいなのは、一応書いて。
橋　すごい。でも息子さんは今、生協で仕事してるじゃないですか。それは具体的にはどういうお仕事？
K　品出しです。商品出し。
橋　すごい。一般の就労ですもんね。
K　でも障害者枠でね。障害者枠の一般就労。
橋　生協さんはそのへん結構がっちりしてるから。
K　そうですね。
橋　ちゃんと生協の中にケアマネさんみたいな、ジョブコーチ的な方がいて。
K　ジョブコーチさんを付けるっていうのも、生協さんのほうでやっていただいて。入社っていうかお店に入る前に、支援の情報をきちっと会議してくれるって聞いてたので。
橋　私、宮城県の手をつなぐ育成会の教育部会でいうところの役員なんです。
K　そうなんですね。
橋　それで取材に行って、やっぱりサポート体制があるなって思いました。
K　うちの子が最初に入ったときに、担当してくれた方が、今幸町に異動で来てるって言ってたような気がします。すごくいい人で、でもその次に入った人もみんないい人だよって。
橋　やっぱり異動があるんですね。
K　最初の頃は親も行って話をしていたから、2 代目ぐらいまでの人は分かるんですけど、今はもう全然行ってないので、今いる方がどういう人なのかははっきり分かんないんですけど。
橋　じゃあ結構動くんですね。
K　そうですね、動きますね。何々さんは何々支店に行った、でも前いた人が戻ってきた、とか。
橋　そういうこともちゃんと教えてくれるんですね。
K　はい。今日はどうだった、ああだったって。
橋　すごいな。何時から何時ぐらいですか。
K　曜日によって。
橋　シフトで？
K　そうですね。大抵、朝何時なんだろう……？
橋　実働 6 時間？
K　6 時間ですね。
橋　すごい。自分で通えて。えーと、電車ですね。
K　電車です。電車が好きなので、あえて。
橋　東北本線？
K　仙石線。学校決めるときも、電車が好きなのであえて。
橋　でも、仙石線結構止まるじゃないですか。
K　でも、いいんです。

橋　それも大丈夫なの？
K　大丈夫。電車に乗れれば、たぶん。もう最近飽きてきたみたいですけど。
橋　電車が止まるとか、例えばそういうことがあったとき、情報はどうやって取る？　スマホからとか？
K　仙石線はあんまり止まらないので。高校に行ってたときはそういうのも、こうなったときはこうするとか、一応学校の……。
橋　シミュレーション？
K　やっぱり小学校から校外学習をしてきた積み重ねで、こういうこともあるんだよって。
橋　ちゃんと連絡できるんですね。
K　連絡、電話はしますね。
橋　困ったときに？
K　うん、します。
橋　メールか電話か。
K　困ってなくても。1 人旅するんです。それがお給料の楽しみで、しおりみたいなのを自分で作るんですよ、パソコンで。それに従って……。
橋　なんかダダくんみたいですね、すごいね。
K　いるんですか、そういう方？　ちゃんと時間も全部入ってるんですよ、電車の時刻が。何々線は何分に着いて、何分でとか全部組み立てて、ここで乗り換えてこうしてこうしてここに行って、どこどこ神社に行ってとか。
橋　で、連絡もちゃんとできる。
K　何時定時連絡、何時定時連絡って決まってて、「いいよ、何もないなら寄こさなくて。こっちは介護で忙しいから」って言ってるんですけど、きちっと連絡をよこすタイプです。
橋　すごい。
K　そこはやっぱり、臨機応変はできない。
橋　電話ですか、メールですか。
K　どっちもありますけど、比較的電話が多いです。ただ私が電話に出ないときも多いので、そうすると LINE で「今ここに着きました。これから何々します」という感じ。
橋　最高ですね。すごい。
K　やりとりは一応そんな心配はしてない。あと今は災害伝言ダイヤルみたいなのありますよね。あれ、私はまだ使い方がよく分かんないんですけど、あの子は学校でちゃんと習ってきたので、「俺は使い方が分かるから、お母さんに教えてやる」って言われて、「教えてね」って言って、それきりそのままで全然教えられてないんですけど。
橋　でも、スマホはすぐ何かあったら出ますもんね。災害伝言ダイヤル。
K　ああそうですか。そんな感じで、逆に向こうのほうが知ってるなっていう。
橋　最近とかも、能登のほうもそうだけれども、近場じゃなくても大きい地震があったりするでしょう。例えば出先でそういう場面とかで連絡してくることとかって？
K　今のところ、出先でそれはないんですけど。
橋　でも、できそうですね。
K　そうですね。それも想定して、行く前にきちっと、もしこういうふうになったらどうするっていうのも、クイズ形式じゃないですけど、一応話はして。そういうこともあるからねって。
橋　小牛田とかでやってくれるもんね。
K　あと台風とかも。ただ、休みがいつでもってわけではないので、この日天気いいから行けそうとかそういうんじゃなくて、とにかく休みのときしか行けないので。行けないと、パニックにはならないんですけど、ちょっとうーん……って。小さい頃、何でもやり直しやり直しっていう子だったんです。やっぱり一人っ子なので、思いどおりにいかないとすぐ「やり直し」って言うのを、先生が「やり直しはないんだよ」って一生懸命教えてくれて。その先生の言うことを聞く子だったんですね。それで、一応やり直しはしませんっていうふうにはなったんですけど、たぶん根本のところは残ってるっぽくて、絶対言わないんですけど、自分の中ではやり直ししてる。でも、それは迷惑がかかってないからいいのかなと思って黙ってますけど。

橋　やり直し感覚で、階段とかでフリーズしちゃう方とかも時々いるけれども、外でのそういう動作ではないんですね。
K　それはないです。ほんとに外ではいたって普通の演技をするというか。ただ家に帰ってくると、もうそれこそ独り言はずっとぶつぶつ言ってるし、奇声は発しますし、あと、手をぷらぷらして行ったり来たりするんですよ。でも外では絶対しない。だから信じてもらえないんですね。でも、それって絶対どっかで出るはずだから、「仕事中でも誰も見てないところでぷらぷらしてんじゃないの？」っていろんな人に聞くんですけど「見たことない」って。
橋　休憩中やってもいいと思うけどね。
K　でもやってない。俺は外ではやりません、みたいな。「そんな二重人格には育ててない」って、「外でやらないなら家でもするな」って言うんですけど、まぁ。
橋　でも、家でやんないと……。
K　ただ親が大変ですけどねって。
橋　まぁねー。
K　こっちのストレスがもう。介護も、お前も、うぉーってなるんですけど。
橋　お母さんはほんとにね、一人何役もねー。
K　お母さんは我慢するしかないのねと思って。
橋　だけど、K さんはちゃんと考えてるから、次のライフステージみたいなことも想定とかはしておいて、アパートタイプでも、グループホームでも……。
K　選択肢はやっぱり作ってあげたい。
橋　そう、自分の安心できるスペースがあったら、共用スペースはここで、自分の部屋に帰ったら自由、それはたぶんできる方ですね。それだったらもう全然 OK じゃないですか。そういうところに入る支援の人は分かってるから、部屋の中でどうぞって。例えばちょっとぐらい部屋の中でうるさくても、帰ってきてからしばらくやって、ああ落ち着いてきたねとかも、たぶん大丈夫なんですよ。もちろん全員がとは言わないですよ。それは学校の先生と同じだけど、いい人のいるところにきっと縁をつなげられると思います。
K　そうですかね。でも、そうじゃない人との関わりもやっぱり経験だし勉強ですから。それがないので。
橋　そうそう、たぶんすごく学んでるのね。彼らはやっぱり学んでる。うちは小 1 から支援学校なので、乱暴な先生とかほんとにいろいろいたけれども、彼らなりにたぶん、人を見る、この先生にはこうやっとこうとか、学んでるし、すぐ見分けるし。
K　ほんとに感受性は強いんでしょうね、きっとね。
橋　うん。成長してるんですよー。育てられますね、親はね。
K　そうですね、学びにはなりますけどね……。
橋　修行もさせられてますわ（笑）。
K　いつまで修行しなきゃないのか。でも、いなきゃよかったって思ったことは一回もないので、やっぱりね。
橋　確認したいんですが、障害名とか、カルテの名前は？
K　自閉症です。
橋　知的障害はなし？
K　あります。
橋　知的もあって、今 19 歳で。震災のときに、保育園で亡くなったお子さんとかも地域的にやっぱりいますよね。そういうことは、息子さんは何か感じるところとか……そのときは分からない？
K　分かってなかったですね。そもそも亡くなるということの認識があんまりなかったと思うんですけど、今となっては分かったし、どういう経緯で亡くなっちゃったのかというのも、同じ幼稚園にいた子のこともほかのお母さんから聞いていたので。その日たまたまお父さんとお母さんが仕事で遅くなって迎えに来れなくて、おじいちゃんおばあちゃんがお迎えに来て、そのおじいちゃんおばあちゃんのおうちが多賀城だった。バスの子たちよりも早くおじいちゃんおばあちゃんが迎えに来てくれて、うれしくて、連れてって、そこで地震に遭って。多賀城は車で逃げても、渋滞にはまっちゃったんです。
橋　多賀城のジャスコ（現イオン）のところとかもね。
K　まさにあそこだったんです。そこで渋滞にはまってしまって。かえってお父さんとお母さんが気の毒で、赤ちゃ

んもいたんですね。だから、その同級生の子と赤ちゃんとおじいちゃんとおばあちゃんと一気に亡くなってしまって。お母さんお父さんの気持ちを考えると、ね……。でも卒園式のときに来てくれました。人数の少ないちっちゃい幼稚園だったので、コミュニティが密っていうほどでもないですけど、みんな知ってる感じだったんで、やっぱりちょっとね。ただ、息子はコミュニケーションがあんまり上手じゃないから、一緒に遊ぼうぜとかでもなく、支援員の先生についてもらってちょっと遊ぶぐらいの。あと、同級生でダウン症の子もいたんです。

橋　ああそうなんだ。それは園の頃から？

K　幼稚園にね。2歳から通ってたところで一緒だった子が「うちも入る」って言って、「一緒だね」っていうふうに。

橋　年も一緒なの？

K　年も一緒だったんです。2歳から通ってたその母子通園のところが、豊作の年って言われて、同じ学年の子がすごくたくさんいたんです。女の子は1人か2人しかいなかったんですけど、全部で5、6人いて、そこから幼稚園に行く子もいれば、幼稚園には行かないで支援学校に入るまでそのままその園で過ごすっていう子と、選択肢をいろいろ考えておいて。これからは本人が決めるにしても、ちっちゃい頃は親が決めるしかないから親が決めたりして。うちも子どもが生まれて障害あるって分かったときは、選択肢は利府支援学校しかないんだと思ってたんです。でも、調べれば支援学級というものもある。ただ、誰でも入れるわけではなかった。今となっては希望すれば誰でも入れますけどね。そこに入るのがその子にとっていいかどうかは別として、一応その選択肢があるっていうのを知って、これから先の住むところでも、仕事場でも、高校でも、やっぱり選択肢は狭めないで広くしてあげて、選ぶのはお前っていうふうにしていかなくちゃいけないんだなって。それでうちは今、これから先のすみかをチョイスしてるところで、まだ全然決まってないんですけど……。また脱線しました。

橋　そうやって亡くなったお子さんがいるってことも、その後映像とかいろんな情報を得て、こういうことだったんだっていうことを本人も少しずつ……。

K　かみ砕いたと思います。

橋　納得して、ああ、あの子がいないのはそういうことなのか、おじいちゃんおばあちゃんがいなくなってしまったとか、そういうこととかも……。小牛田に行った後とかもいろいろな状況の方がいたはずで、ああそういうことだったんだってちゃんと積み上がっていってるはずだから。自分で学習するシステムがすごい。

K　ただ、それがほんとにそうなのか分からないです。たぶんそうだったのかなっていう想定で今何となくでしゃべってますけど、本人があのときほんとに無だったけど、「どうだった？」ってこっちが聞いても「うーん」って、たぶん言葉で伝えられないんだと思います。

橋　しゃべり言葉よりも、書くか、文字入力が一番本心を出せるんですって。変換のシステムで、彼らの脳の作りはしゃべりが一番難しいと。できたら、文字入力とかで、ちょっと箇条書きとかで構わないのから、もし本人がやってもいいよってなったら、書くなり入力なりとかでできたら……。

K　テレビとかでも特集したことがあったじゃないですか。そういうときに、私もそれを思ったんですよ。

橋　メールでもやらない？

K　全然ダメだった。でも、それは随分前だから……。

橋　突然始めるかもしれないし。私が前に入ってた親の会の会長さんの息子さんが、決して軽度ではないんだけれど、メールだとすごく本心を出せて、「あのときお母さんのこれが嫌だった」とか正直に伝えてくるんですって。お母さんも、ガーンって、え、そうだったの、そのとき言ってよ、とか思うけども、しゃべりでは出せないけどメールでは出せる。だから、うちも何とかメールをやらせたいと思って。できないんだけど。できないっていうか、不可能ではないけどやっぱりやらない。そんなにしない。

K　うちもできなくはないですけど、文章が必要最小限。

橋　いつ何かでやるようになるか分からないので。

K　なってくれたらちょっと聞けるかもしれない。今回（このインタビューに）「俺も行きたい」みたいに言ったときに、私のほうがすごいびっくりで、えーって。この子はしゃべるのは嫌いじゃないんだろうなっていうふうには見ていたんですけど。

橋　コミュニケーションも、誰に対しても苦手なわけではなくて、ちゃんと選んでるはずだから。

K　嫌いではないし、友達も欲しいんだとは思うんです、見てると。

橋　欲しいのかな……？　合う人なら欲しい。だからそれこそ寄宿舎の先生は、本人としては波長が合うって思ってたのかもしれないし。

K　ほんとに、もう異星人で分からない。

橋　でもトラブル起こさないから、いいんです。割と一般就労っていうか、そのぐらいの方って、どうしても対人トラブルが多くなりがち。

K　人が代わったりするので。

橋　だったりとか、巻き込まれたりする。小牛田の支援学校とかでも、巻き込み型の方が必ずいるので、巻き込まれたりする人もいるけど、あんまり巻き込まれない？

K　淡々としてるみたいです。

橋　それはすごいこと。

K　もう分からない。だからもうほったらかしです。

橋　それがよかったんだ。やっぱり全部理由がないことはないはずなので。私すごいと思う、今日勉強になった。

K　えー、私は一体何をしゃべってきたんでしょう。たぶん今日帰ったら主人に「どうだった？」って聞かれるんですけど、「私は何をしゃべってきたんでしょう」って言いそう（笑）。

橋　とんでもないです、全然。